

アラサ・ケーサリ・シヴァン

— ティンナッパン論考訳解 —

正 信 公 章

I

シンガポール本島の北部、距離でいうと市街中心部よりは対岸マレーシアのジョホールバルによほど近いところに、正式名称をシュリー・アラサ・ケーサリ・シヴァン・コーイル（もしくはアーラヤム）という、シヴァン神を祀る寺がある。

観光客などめったに訪れることのないこの寺の存在を筆者が知ったのは全くの偶然によるもので、1999年以來、調査のために何度か足を運んでいるが、その間ずっとこの寺の名称のことが気になっていた。「幸ある」の意味でしばしば語頭に冠せられる「シュリー」とタミル系ヒンドゥー教寺院の総称である「コーイル」（もしくは「アーラヤム」）が名称の前後にきているのは、他の諸例から考えて全く問題はない。また、この寺の本尊の名である「シヴァン」が名称の一部に見えるのは、礼拝作法の書にも「本尊の名で、幸あるコーイルは名を得る」とある¹⁾ように通例のことである。問題は第2、第3語にあたる「アラサ」、「ケーサリ」の部分で、調査のおり、寺の関係者は寺名の由来をこの寺のご神木であるアラサの木に結びつけて説明したが、「ケーサリ」の的確な意味については明確な回答が得られなかった。一方で、辞書には2語一体となった「アラサゲーサリ」がタミル系の人名や称号として説明されており、こちらの意味も無視するわけにはいかない。そんなわけで、「アラサ」、「ケーサリ」の意味、それらと直後の「シヴァン」とのつながりは判然としないままであった。

2006年にこの寺を訪れた際、筆者はこの寺の移転、再建を記念して刊行された冊子入手する機会を得たが、そこには、この寺の名称の意味について

て詳細に論じた、スバ・ティンナッパンによる論考が収められていた²⁾。ここでは「アラサ」、「ケーサリ」、「シヴァン」3語の関係が古典の用例を駆使して徹底的に追究されることで、当該名称のもつ多義的性格が明らかにされており、これによって筆者のいっていた疑問の多くは解消し、考察をすすめるうえでの方向性が得られることになった。

以下にまずティンナッパンの論考（タミル文）を全文訳出し、その趣旨を総括したうえで若干の点に説き及んでみたい。訳文には、訳者による補足、説明をそれぞれ〔 〕、（ ）で示し、引用箇所³⁾の判明したものについては、Project Madurai ETexts（以下PME）の該当番号を参照・整理して（ ）内に記す。

II

アラサ・ケーサリ・シヴァン——いくつかの考察

ドクター・スバ・ティンナッパン

シンガポール国立大学

アラサ・ケーサリ・シヴァンという語句は、アラス、ケーサリ、シヴァンという3つの語でかたちをなす一まとまり。アラスというのは、アラサン（「王」）、アラサの木という2つの意味をさす。ケーサリというのは、ライオンをさす。この2つの語はともに、シヴァンという語に対する形容辞としてこの語句のなかに含まれている。というわけで、この語句の深い意味に、アラス・シヴァン、ケーサリ・シヴァン、アラサ・ケーサリ・シヴァンと3つに分けて注目してみよう。

アラス・シヴァン

国をおさめるアラサンを神とみなす伝統がタミル語にある。だからこそ、アラサン、神いずれをもさすべく、アーンダヴァン（「統治者」）、イライヴァン（「主」⁴⁾）といった語がもちいられた。これとまったくおなじで、コーイルという語は、アラサンがくらす宮殿をも、神がいる聖所をもさした。「身を

正して守護する王は民に神とみなされる」というティルックラル：388が、こうした〔扱い〕に対する理由をいっている。律法の書と政策の書がともに説く道にあって、アラサンは民を守護している。というわけで、彼は生まれはあくまで人間であっても、彼は民に神とみなされている。この〔ティルック〕ラル章句が含まれるイライマーッチ（「主の威光」）という章の意味をいうパリメーラリャガルは、アラサンがよき性質、よきおこないによって世界の守護者のかたちをとりつつ世界を守護することから、神とよばれたことをいっている。アラサンのしるしである冠、傘、旗、扠子、ゾウかご、太鼓、ゾウをはじめとするものは、神にもふさわしいものである。

「幸ある王を³⁾目にすると『ティルマル（ヴィシュヌ神）を私は見たのよ』〔と彼女はいう〕」（4.4.8）とあるように、〔ティルヴァーイモリの作者〕ナンマルヴァールはアラサンをヴィシュヌとみている。これとまったくおなじで、シヴァン大神をもアラサンとみる伝統がある。「ウッタラゴーサマンガイのアラス！」（105 ff.）とも「黄金の〔都〕マドゥライのアラス！ 讃えあれ！」（4⁹⁰）とも「ティルッペルンドゥライの王！」（372, 374）とも、ティルヴァーサガムでマーニッカヴァーサガルはシヴァン大神によびかけている。さらに、〔作中の〕ティルッタサーンガム（「幸ある10要素」）という章題のもとで、シヴァン大神をアラサンとみなして、〔後者〕に属する、名、国、都市・集落、川、山、乗り物、軍隊、太鼓、花づな、旗といった10の要素を、おなじその人があげてうたっている。

ティルヴィライヤーダル・プラーナムは、シヴァン大神がアラサンとしてやって来たいわれをミーナーッチ・ティルマナ・パダラム（「ミーナーッチの婚礼の章」）でうまく説明している。マドゥライを首都として王権を行使したマラヤットヴァサ・パーンディヤンの娘として、ウマーデーヴィヤールは地上に降下し、タダーダガイという名をもっていた。技芸全般を彼女は学びとった。アラサル（「アラサン」の複数形）にふさわしい戦いのしかたを身につけた。父親は彼女にパーンディヤ国のアラシ（「アラサン」の女性形）として冠を授けた。

彼女をめとって、全能のシヴァン大神はソーマスンダラ・パーンディヤンとして〔彼女に〕冠をつけさせて、パーンディヤ国をおさめる王となった。このことをティルヴィライヤーダル・プラーナムは

「ほえる牡ウシの旗は、美しいコイの旗に、
 へびの飾りは、^{きん}金の飾りに、
 つばみのひろくカドウツカイは、ヴェーンブの花づなに、
 トラの皮は、金の衣服に、
 月の巻上げ髪は、金剛石の冠になり、
 かくれていたのが出てくる仕方で、マドゥライの
 地に住まうソーマスングラ神は、
 パンディヤンを名のる者となって勢威をふるった」

といている。シヴァン大神の牡ウシの旗は、パンディヤ家の旗に変わった。彼が身につけるへびたちは、金の装身具になった。彼のコンドライの花づなは、ヴェーンブの花づなになった。トラ皮の衣類は、金の衣類になった。三日月をつけた巻上げ髪は、金剛の冠になった。こんなふうにして、マドゥライのソーマスングラ神は、パンディヤンを名のる者となって王権を行使した。神々はみな姿かわって、奉仕するためにやって来た。そののち、パンディヤの諸王が祈願するときはいつでも、助力をうんとしてティルヴィライヤードル（「幸ある遊び」とされる種々の神わざ）をシヴァンは演じた。「世界のありようを定める者がやって来て、ある、至高の光を放つ月の家系の、宝石の灯明をめとり、〔彼女に〕王冠をかぶらせて大地をおさめた」とそのプラナムは語っている。

東南アジアの国々、とくにカンボジア、タイランドといった国々では、シヴァンの〔ご神体である〕リングムの礼拝が、統治するアラサンを拝む礼拝のかたちにもなった。これにテーヴァラージャー（「神である王」）礼拝との名がある。国をおさめるアラサルの力がシヴァンからシヴァンのリングムをとおして得られるとも、そのリングムは山の頂に置いて守られることを要するとも考えられた。カンボジアに後代あらわれた〔数々の〕彫像は、シヴァン、ヴィシュヌをはじめとする神々をうつしだすとともに、その彫像をすえたアラサルたちをもあらわした。その彫像は、アラサルたちの姿そのままにかたどられた。タイランド国では、シヴァン大神をたたえる、テーヴァーラムの諸々のパディガム（「10詩節一組〔の章〕」）もティルヴェンバーヴァイの諸詩節も、アラサルの戴冠式のときの大切な要素に今日でも数えられている。

このことは、アラサンをシヴァンとみなすことを示す。またそこでは、タイ月に祝われる、「ロージンジャー」（タイ語で「ぶらんこゆすり」の意）といわれるウーンジャル（「ぶらんこ」祭礼⁴⁾のとき、シヴァンが地上世界に来てくださることを、タイランドのアラサルみずからが、その祭礼に来てくださって祭場にシヴァンとして姿を見せてくださることをとおして示唆した。

そのとき、〔ティルヴェン〕バーヴァイの諸詩節をうたって、アラサンをシヴァンとして民は礼拝した。アラサンがそのとき民に与える賜り物は、シヴァンがくれたものとみなされた。そこでは、〔ティルヴェン〕バーヴァイの諸詩節が、神に対する帰依の詩節としてつかわれたと同時に、アラサルの神性に気づかせるためにもつかわれたと解することができる。民にアラサルがテーヴァラージャーとして、すなわちシヴァンとして姿を見せてくださったことを、上の事実は示唆している。

アラスというのがアラサの木をさす場合にも、それはシヴァンとつながりをもつものであることを今度はみよう。アラスはいずれの木に対しても筆頭の位置にある。だからこそ、アラス（「王」）といわれた。それと同様に、いずれの神に対しても筆頭の位置にあるシヴァンも、アラスにはほかならないではないか。婚礼のときにアラサーニッカール（「支える足となる、アラス〔の枝〕」の意⁵⁾を植えるのも、ただただ、アラサンの名にかけての誓いがまえもって、すなわちシヴァンの名にかけての誓いがまえもっておこなわれるということを示唆するためではないか。さらに、アラサの木とヴェーッパの木との婚礼をとりおこなっておく慣わしは、どんなことを示唆しているのか？ ヴェーンブ（＝ヴェーッパの木）がサクティ（「力」の体現としての最高女神）のご神体だということなら、アラスはシヴァンのご神体だというまさにそのことを示唆している。

アラスは聖地の樹木として多くの、幸あるコーイルにその位置を占めていることも我々はみている。そういうわけで、アラサの木の根もとに鎮座したシヴァン大神はアラサ・ケーサリ〔・シヴァン〕ということになる。

アラサの木にはボーディの木（菩提樹）という一名がある。教主ブッタル（仏陀）が知を得たところは、ボーディの木かげにほかならない。というわけでアラサの木は知の象徴、それと同様にシヴァン大神も知の体現。「知のかたまりとなっていた大神が、よきアディヤール（献身者）〔に対して〕⁶⁾ 欠

陥のかたまりをとりさるそのこともまた、確かなことのように」(1.745) というのはティルニャーナ・サンバンダルのテーヴァーラム。また、ティルニャーナ・サンバンダルにシヴァン大神も、シヴァンの知、学芸の知、真理の知をはじめとする多様な知を乳と一緒に与えたことを我々は知ろう。知というのは神の乳、すなわち愛にほかならないといわれている。知を飲んだお方、というのはセーッキリャールのことば。

ケーサリ・シヴァン

シヴァン大神に、ライオンとして、すなわちケーサリとして、ティルナーヴッカラサルが「私はおもうといったところで、ほんとに私はおもうのだろうか〔我々の大神のおみ足をただおもう以外に〕」(6.972) という〔詩句ではじまる、〕自身のティルuppガルール・テーヴァーラ・パディガムで呼びかけている。「ひとつも恐れることなく、神々がもとめるままに〔乳〕海の毒を飲んで、死ぬことなく老いることのないライオン！おまえの足にこそ私はすがっている。ティルuppガールの恵みなす、神のなかの神！」(6.973) という詩句は、このパディガムの2番目の詩節に含まれている。このパディガムは、聖者ティルナーヴッカラサルが絶対自由の境地にいたったときにうたったもので、彼がうたった最後のパディガム。というわけで、ティルuppガールではこの〔パディガムがうたわれる〕祭礼のときに、まえもってシヴァンのリンガムに対してライオンの姿に身づくろいさせる儀式がおこなわれるそうである。

ヴィシュヌがとった10化身のひとつが、ナラシンママ（「人間、ライオン〔の合成神格〕」）という化身。イラニャンを殺した化身ナラシンママがおごりたかぶって高笑いするのをみたピラマンがシヴァン大神をよびだすと、シヴァンは化身サラバムの姿をとってナラシンガム（=ナラシンママ）の皮をはいで自分の身につけたとの、あるプラーナムの所伝がある。化身サラバムの姿は8つの足と2つの頭とをもった鳥獣の姿とも、これには2つの顔と両側の翼とがあるともいわれる。ライオンの体と8つの足とをあわせた鳥とカーンジ・プラーナムはいっている。化身サラバムの姿は、シヴァンをライオンで示している。

アラサゲーサリ（アラサ・ケーサリ）・シヴァン

アラサルたちのなかでライオンのような者、すなわち、筆頭の位置にある者、卓越した者、たよれる者、至上の者がシヴァン大神だということを、アラサ・ケーサリという語句は示唆する。

「ただ一つの冠をかぶっておさめるアラスよりもたよれる者である。自分をたよってきた者たちにイダイマルドゥの男〔神〕こそは」(5. 145) と、ティルナーヴッカラサルは〔自身のテーヴァーラムで〕ティルヴィダイマルットゥール（「幸あるイダイマルドゥの町」）の神をうたっている。冠をつけて世界をおさめるアラサンよりも、シヴァンは帰依する者たちにたよれる者であることをこの語句はいつている。

アラサンは地上世界の一部だけをおさめている。けれどもシヴァンはどうか、地、水、火、風、空、日、月といったすべてを含んだ諸々の宇宙卵をことごとく造りなしておさめる者ではないのか。それ故、彼はアラサルたちすべてに対する支配者にほかならないではないか。

アラサンは臣民を守護するという仕事だけをしている。けれどもシヴァンはどうか、宇宙卵の中身も創造する、守護する、破壊する、隠す、恵むといった5つもの仕事をしている偉大な恩恵者。というわけで、彼がアラサルよりもどれほど偉大かということがわかる。

ティルヴィライヤダル・プラーナムで、人々にはアラスとなり、敵対する王たちにはマダンガルとなり、年頃の娘たちにはマンマダン（恋の男神）となり、ニラマガル（大地の女神）には〔彼女を救う〕ティルマールとなってシヴァンはいた、とその作者パランジョーディヤールはティルマナ・パダラムを結んでいる。人々にはシヴァン大神はアラサン、敵対する王たちには彼はあるライオン—マダンガル—すなわちケーサリというわけで、シヴァンはアラサゲーサリということになる。

「天空をおさめる神々にまさっているヴェーダの知者を、
大地をおさめる王たちに威厳をたもっている者を、
恵みの高尚タミル文芸をもたらす、

恵みのパーンディ（パーンディヤ）国の者を、

〔王〕女をしたがえる配偶者を、あがめよ、ベルンドゥライで。

こころゆくまで、〔つけた〕足環を見せて犬の私を⁷⁾しもべにした、
アンナーマライの主を我々はうたおう、ほら、お手玉あーっ！」(184)

というティルヴァーサガムの〔お手玉唄の〕詩節で、マーニッカヴァーサガルはシヴァン大神を、天空の世界をおさめている、インディランをはじめとする神々にもまさる知者とも、地上の世界をおさめているアラサルたちすべての上に立つ本性をもった者ともみている。

アラサンというものは、ピラマン、インディラン、ヴァーユ、イヤマン、スーリヤン、アックニ、ヴァルナン、サンディラン、クベーランといったこの者たちの特性によって作りだされた、とスッキラ・ニーディ（シュクラ・ニーティ）というサンスクリットの書物がいつている。この者たちすべての上に立つ者となったシヴァン大神は、アラサルすべての上に立つ者にちがいないではないか。アラサゲーサリにちがいないではないか。

アラサンを神の象徴と我々はみなしている。「幸ある王を目にすると『ティルマールを私は見たのよ』〔と彼女はいう〕」（前出）とナンマールヴァールはいつている。このようなティルマールさえも目にすることができないおみ足をそなえた者がシヴァン⁸⁾ということであれば、シヴァンはアラサルにとってアラサ・ケーサリにちがいないではないか。

アラサの木はピルマー、ヴィシュヌ、シヴァンという三神一体の体現とも、これを毎日右回りする者は三〔神〕とも右回りしたことになるとも、功德が増すともいわれる。マール（＝ヴィシュヌ）、アヤン（＝ピルマー）が目にすることができない足、髪をもったシヴァン⁹⁾はアラサ・ケーサリにちがいないではないか。

化身サラバムのいわれ（前出）も、シヴァンがアラサ・ケーサリであるということを示唆している。

アラサゲーサリという語句はふたりの人をさすと、アビダーナ・シンダーマニというタミル語の学芸百科はいつている。

1. タナダッタンは〔神〕威を知ってシヴァン供養に従事し、ナーガパッティナムにあるシヴァンのコーイルを新しくした。ここでタナダッタンというのはカーライッカール・アンマイヤールの父であろう。でなければ

ば、ヴィンドゥダッタンの息子で、ヴァーマデーヴァムニヴァルに教示をえてシヴァン供養をし、ヤマン（閻魔）の都にいてまたもや命を得、絶対自由の境地にいたるをえた人である可能性もある。

2. ヤールッパーナム（ジャフナ）のナッルールによっていた人。パララーサセーガラ¹⁰・マハーラージャーの義理の息子。パーンディヤ国のアールヴァール・ティル・ナガリをでてアシュターヴァダーニ・イラーマヌジャ・カヴィラーヤルのところで学問をおさめた。この人の年代は、多少前後するとして330¹¹年前といわれる。この人は、北の作品イラグヴァンサ・カーヴィヤム（ラグヴァンシャ・カーヴィヤ）をタミル語であらわした。シンガポールでヤールッパーナムの人がこのコーイルを得た関係で、このコーイルはアラサ・ケーサリ・シヴァン・コーイルともよばれているのであろう。

アラサ・ケーサリという語に相当する代替形は、イラーサ・シンガムというもの。そのおなじ語句をもちいて、ティルナーヴッカラサルが自身のテーヴァーラムのパーヴェナーサ（「罪の消滅」）・パディガムでシヴァン大神によびかける詩節は、以下のとおり。

美あふれる¹²イラーサ・シンガムを、

イラーメーッチュラムの、我々のみごとな牡ウシを、
髪ゆたかな女を山のような胸に飾る、

クットラーラムの、我々の踊る神を、
日かげがふんだんにある樹林ネドゥンガラムのずっといる永遠の花婿を、
火の燃えさかる色をした父なる神を、いとしいおもいで私は抱^だいていたのだ。(4. 151)

イラーサ・シンガムなるアラサ・ケーサリ・シヴァン大神を拝んで、我々は我々の罪をすっかり除こう。

III

ティンナッパンの論考に示される「アラサ・ケーサリ・シヴァン」の語義分析は、その項立てからも明らかなように、核となる語「シヴァン」に対し、「アラス」（「アラサ」の基本形とされる）、「ケーサリ」、「アラサゲーサリ（アラサ・ケーサリ）」という3つの限定要素を想定することですすめられる。

まず〈アラス・シヴァン〉の項では、「アラス」に「王」、「アラサの木」の2義を認めたとうえで、東南アジアの一部を含むタミル文化圏での王と神を等置する伝統を背景に「王、シヴァン」(①)の意味が、また、アラサの霊木とシヴァンの密接な関係を示す諸例によって「アラサの木、シヴァン」(②)の意味がそれぞれ導かれ、つづく〈ケーサリ・シヴァン〉の項でも、同様にして「ライオン、シヴァン」(③)の意味が例証される。

最後の〈アラサゲーサリ・シヴァン〉の項では、第1項下で「アラス」に認めたとおなじ2義を「アラサゲーサリ」に認めてこれを異格限定の合成語と解釈し、それぞれ「王たちのなかのライオン、シヴァン」(④)、「アラサの木(=三大神)のなかのライオン、シヴァン」(⑤)の意味が導かれる。また1箇所、上の合成語を同格限定とみた「王かつライオン、シヴァン」(①+③)の意味も提出される。

かくしてティンナッパンは文献の用例や慣行をふまえた語義解釈から、寺名にシヴァンに対するあわせて5通りの形容を読みとるのであるが、終わり近くでなされる、「アラサゲーサリ」を特定の人名とみてこれを寺名に関係づける議論は、当該寺院の成立事情にふれるものとして注目される。それは、ヤールッパーナム出身の者がシンガポールで寺を得たために、おなじヤールッパーナムの著名な文学者の名が寺名の一部にとられたのではないかというものである。論者はこれ以上詳しいことは述べていないが、この寺のいわれを述べたある資料によれば、寺の創建(1946年)に功績のあった「イランガイ・タミリヤル」(ジャフナ半島を中心にスリランカに古くから定住するタミル人)としてケー・イェン・セツライヤーの名があげられており¹³⁾、あるいはこの人が論者のいう、寺を得たヤールッパーナムの人なのかもしれない。ここからは「アラサゲーサリ〔ゆかりの〕シヴァン〔寺院〕」(⑥)といった意

味がひき出せるだろう。ここでは詳説しないが、セッライヤーの例からうかがえるように、この寺は歴史的にスリランカと深い関係にあり、その意味からもティンナッパンの議論は魅力あるものとなっている¹⁴⁾。

ところで、直前にあげたおなじ資料の語るところによれば、寺の起こりは、1924年、あるアラサの木の根もとに、一人の行者が三叉のほこ（シヴァンの持ち物）をすえて毎日拝むようになったことに始まるとされ¹⁵⁾、当初は現在みられるような、本尊となるリングムもこれを安置する祀堂もなく、このアラサの木そのものがシヴァンのご神体であったことが知られる。このことと先の議論をあわせて、もう一度「アラサ・ケーサリ・シヴァン」の名称にたちかえてみると、本格的な寺院の建造へといたる聖所の規模の拡大にもなって、「アラサ」を共通項とした、②→②+⑥の意味の推移があったであろうことが見えてくる。その意味で、ティンナッパンが分析してみせる、のこる4つの意味をもあわせたその遺漏なき語義は、いまやその地位を確たるものにしたこの寺の名称にふさわしい一つの完成形ということができよう。すなわち、「アラサゲーサリ〔ゆかりの、その名も〕〈アラサの木に宿る、王にして諸神・諸王のライオンたるシヴァン〉〔寺院〕」である。



アラサの木

2000年筆者撮影、本尊を祀る背面から

追記

論考の著者であるティンナッパン氏には、私信を通じて日本語への訳出を快諾いただき、また引用語句の文法上の形と意味について教示いただいた。謝意を表したい。

注

- 1) Ere. Shanmugavadivel, *Temple Worship*, Kuala Lumpur 2000, tirukkōyilkaḷil vaḷipaṭum murai 25).

- 2) SuPa. *Tiṅṅappan*, “araca kēcari civan — cila cintaṅkaḷ”, in : *Sri Arasakesari Sivan Temple, Consecration Ceremony, Souvenir Magazine, 20th March 2005*, Singapore 2005, pp. 65 – 70.
- 3) *mannanaik* でよむが, PME では *mannaraik* 。
- 4) シヴァン神を迎える祭礼で, バンコク都庁近くの高さ約 20 メートルの大ぶらんこに 4 人のバラモンが乗ってアクロバティックな儀式をおこなうのが年中行事となっていたが, 危険なため 1930 年代に廃止された。この祭礼の別名 *trii-yampawaai* は, 祭礼でうたわれる詩節の名称 *tiruvempāvai* (本文直後の「ティルヴェンパーヴァイ」) からの借用タイ語とみられる。富田竹次郎編『タイ日大辞典』めこん 1997, 〈*chiṅ-cháa*〉, 〈*trii-yampawaai*〉 各項参照。
- 5) 王の臨在を象徴するものとして, 婚儀がとりおこなわれる場に他の種類の木の枝とともに固定され, その周囲を花婿と花嫁がまわる。Tamil Lexicon 当該項参照。
- 6) PME により *aṭiyār* の直後に *mēl* を補う。
- 7) *nāyēnē* を PME : *nāyēnai* でよむ。
- 8) 次注参照。
- 9) リンガムから出現するシヴァンの神話をふまえている。以下に, その一例をタミル文から試訳する。[], () はそれぞれ訳者による補足, 説明。
 世にあるものはどれも, [おまえではなく] この自分がつくったのだ, と思いがあってピランマー (=ピルマー) はヴィシュヌを非難した。両者に敵意が生じた。両者ともに, 戦いをしてどちらが勝つにせよ, その者こそが第一の者ということで戦いをした。このため, 世にいる生きものたちはみな災いをこうむった。両者の無知を去らせるべく, シヴァンはリンガムの姿で彼らのま上に立って「私の足と髪とを [あなたたちの] どちらが目にすることができるにせよ, どちらが最初に見るにせよ, その者こそが第一の者」と言った。ピランマーは白い霊鳥になると, 天にむかっていった。ティルマールは野ブタの姿をとって地下に行く。地の底までいった彼だが [シヴァンの] 足 [を飾る] 花々を目にするにはできない。ティルマールは自分の負けを認める。[ピランマーもまたおなじ。] 自分たちの過ちに気づいて, シヴァンこそ完全な第一の神と拝んで彼らは立っている。その彼の名前こそイリンゴールッパヴァ・ムールッティ (「リンガムから出現するご神体」) である。
- 出典は, S. T. M. Thanneer Malaiyam Sthapathy/V. K. Ganam Rajan *Silpi*, “5 *nilai rājakōpurattin tattuvamum atil putitāka ceytuḷḷa cirpaṅkaḷin varalārukaḷum*”, in : M. K. Narayanan (ed.), *Sri Arasakesari Sivan Temple, Cons[ecr]ation Ceremony 25-04-1996, Souvenir Magazine*, Singapore 1996, 〈*ilīṅkōrpava mūrtti*〉 の項。
- 10) Tamil Lexicon その他を参照して, -*kēcari* を -*cēkara* に訂正。
- 11) 著者からの私信 (070808) で誤植と確認できた 3300 を訂正。ジャフナ王家の所伝によれば, アラサゲーサリは 1616 年に暗殺されたとされる (http://www.jaffnaroyalfamily.org/history_3.php/070809 検索)。

- 12) PME により eḷiḷār を eḷilār に訂正。
- 13) Ci. Cēnātīrācā, “śrī aracakēcari civaṇ kōyil varalāru”, in: M. K. Narayanan (ed.), *Sri Arasakesari Sivan Temple, Cons[ecr]ation Ceremony 25-04-1996, Souvenir Magazine*, Singapore 1996, pp. 9-10.
- 14) 関連して, ジャフナのニールヴェーリにあるピッライヤール寺院の名称「ア
ラサゲーサリ・ピッライヤール・コーヴィル (=コーイル)」の由来について
も考えてみる価値がある。
- 15) Cēnātīrācā, op. cit., p. 9.